

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00664

研究課題名（和文）非顕在的主要部移動による素性一致理論の構築

研究課題名（英文）Construction of a theory of feature agreement in terms of covert head movement

研究代表者

岡 俊房 (Oka, Toshifusa)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00211805

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：理論言語学統語論分野における最新の研究プログラムであるミニマリストプログラムのもとでは、「併合」「ラベル付け」「位相」「転送」「素性一致」等の基本メカニズムを組み込んだ統語理論が、Noam Chomskyを中心に様々な研究者によって提案されている。この延長線上に新しい観点を導入し、永らく主要なテーマとして研究対象となってきた「移動」「格」「束縛」などの現象が、より原理的、統一的に説明される理論を構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間言語（自然言語）における最も根本的な性質は「併合」（2つの要素を結合してより大きなユニットを作る操作）と考えられているが、本研究はつまるところ「併合」とはどのようなプロセスかを明らかにしようとする取り組みの一部であり、この探究の示す方向性が正しければ、究極的には言語の発生を解明することに繋がっていくものと期待される。

研究成果の概要（英文）：Under the Minimalist Program, which is the latest research program in the field of theoretical syntax of language, Noam Chomsky and others have put forth syntactic theories incorporating mechanisms such as Merge, Labeling, Phase, Transfer, and Feature Agreement. Along these lines, I introduced new perspectives and constructed a theory that explains phenomena such as Movement, Case and Binding, which have long been the main targets of research, in a more principled and unified manner.

研究分野：英語学・言語学（統語論）

キーワード：素性一致 格 ラベル 位相 併合 移動 非顕在的主要部移動 束縛条件

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

理論言語学統語論分野における最新の研究プログラムであるミニマリストプログラムのもとでは、「併合」「ラベル付け」「位相」「転送」「素性一致」等のメカニズムを組み込んだ理論が、Noam Chomsky を中心に様々な研究者によって提案されている。この延長線上に新しい観点を導入し、永らく主要なテーマとして研究対象となってきた「移動」「格」「束縛」などの現象が、より原理的、統一的に説明されるような、創造性に満ちた統語理論の出現を期待すべき状況であった。

2. 研究の目的

研究開始時の想定として、本研究の核心には次の3つの問いがある。

1. 「格」とは何か。(一般に考えられているように「格」は意味解釈を受けないとすると、そのようなものが何故言語に存在するのか。)
2. 「ラベル」は存在するのか。(意味解釈のために「ラベル」が必要不可欠とは言えないのではないか。そうであるとすれば「ラベル」自体存在しないのではないか。)
3. 「素性一致操作(Agree)」はいったいどのような機能を有するのか。(素性一致のシステムを適正に構築することによって格やラベルに関わる問題を解決し、「移動」等の統語現象に見られる性質をうまく説明できるのではないか。)

このような問いに答えるには独自性・創造性が不可欠であり、これに成功すれば統語論研究の新たな道筋を示すこととなる。本研究の目的は、これらの問いに答える素性一致の理論を構築することである。(当初は素性一致操作を非顕在的主要部移動のメカニズムを用いて再設計することを目標としていたが、この目標を超えてさらに、素性一致を伴わない現象(束縛現象等)に関しても非顕在主要部移動のメカニズムを用いて説明する理論の構築にまで研究を発展させることができた。)

3. 研究の方法

本研究は理論研究である。そのため個人的な作業として、先行研究を吟味した上で自らひたすら考えることが重要であることはいうまでもない。このような研究を進めていくうえで極めて有効なのは、他の研究者との対話である。自分のアイデアをぶつけ、批判され、情報もらい、別の考えを聞き、刺激を受けるというプロセスにより、またあらたなアイデアを生み出していく。そのため、できるかぎり、忌憚なく意見を交わせるような一流の研究者と直接会う機会を作り、対面が叶わない場合はZoom等を活用し、また少人数の研究会を開催した。学会等にも進んで参加し、新たな知見を得るように努めた。

4. 研究成果

研究成果としては、次の2段階に分けられる。

(1) ラベルを統語理論から排除する素性一致システムの開発

本研究開始時に立てた3つの問い(1. 「格」とは何か。 2. 「ラベル」は存在するのか。 3. 「素性一致操作(Agree)」はいったいどのような機能を有するのか。)に答える理論を構築した。この研究成果は、2021年7月刊行(開拓社、共著)「移動現象を巡る諸問題」に所収の第2章「素性一致メカニズムと移動現象」(単著)にまとめている。

「格」とは何かという問いについては、基本的には Oka (2000) “Feature Checking and Movement.” (*Tsukuba English Studies 19*, pp. 1-23. Tsukuba English Linguistic Society.) を踏襲し、一致素性と平行的・対称的に対をなす素性として格を捉えるが、そこでは扱わなかった、There is a book on the desk / There are books on the desk のような存在構文に見られる「長距離一致」(すなわち「長距離格付与」)の現象を、Guéron and Hoekstra (1988, 2004)のT連鎖(T-chain)理論を素性一致メカニズムに取り込むことで、「素性一致の連鎖」として捉えることで説明することに成功した。

「ラベル」は存在するのかという問いについては、Noam Chomsky をはじめとしてほとんどすべての研究者がラベルの存在を疑いもなく前提とする中で、挑戦的な取り組みであった。先行研究においては、ラベル付与のメカニズムが様々な統語現象(とくに「基準位置(Criterial positions)に関わる現象」)を統一的に説明するメカニズムとして論じられる。Chomsky が提案するラベルを用いた EPP と ECP の統一的説明に対して、位相理論(とくに転送の条件とタイミング)と素性一致理論(とくに補文標識一致)を発展させることで、

ラベルおよびラベル付与を仮定することなしに説明できることを示した。また、「対称性の破れ」(XP-YP 構造からの XP 移動)についても、説明対象となる統語現象の範囲を広げるとともに、どのみち必要な「線形化」のメカニズムに関して素性一致を組み込んだアルゴリズムを提案し、ラベル理論以上の説明力があることを示した。これらにより、ラベルそのものを統語理論から排除することに成功した。ラベルは、格などと異なり形態的な証拠もなく、言語の進化や獲得の観点から、排除できるのであれば、それが望ましい方向と言える。これは統語理論に大きな転換をもたらすものである。

(2) 非顕在的主要部移動による素性一致メカニズムの設計、および他現象への応用

「素性一致操作(Agree)」は、狭い意味での統語部門(Narrow Syntax)で適用される操作と通常考えられている。しかし、その一方で、統語部門は「併合(Merge)」に限定されるべきという考えが主流となっている。これは矛盾した状況であり、解決されなければならない。理論的な観点から、問題になるのは素性一致のほうであり、このメカニズムが見直されなければならない。そこで、新しいアイデアとして、主要部移動を用いて素性一致メカニズムを再設計する。すなわち、素性一致は連続する2つのプロセスによって実行される：統語部門において主要部が(集合)併合され、派生された統語体が形態操作(外在化)の入力となり、一致する素性が削除される。この統語体が下位の主要部位置で具現化されれば「非顕在的」となる。

この「非顕在的主要部移動」が連続循環的に起これば非局所的な現象が生じるという予測が導かれる。つまり、通常局所的である素性一致とは異なる現象の説明にも応用が可能ということである。それはすなわちこの非顕在的主要部アプローチの正当化ともなる。素性一致現象に見られる局所性が、一致プロセスに不可欠の形態操作に由来するとすれば、形態操作と関わりのない意味解釈に関わる現象に非局所性が期待される。具体的には、非局所性を示す元位置 Wh 解釈や束縛現象が想定される。束縛については、2024年3月刊行“A Covert Head-Movement Approach to Binding Phenomena” (*JELS 41: Papers from the Forty-First Conference November 4-5, 2023 and from the Sixteenth International Spring Forum May 13-14, 2023 of The English Linguistic Society of Japan*, pp. 206-215. The English Linguistic Society of Japan.) (2023年11月日本英語学会第41回大会研究発表のプロシーディング)に基本的なアイデアを発表している。

束縛条件 C は、非顕在的主要部移動のアプローチでは、「介在効果」として捉えられる。... ..の構造において、 が C を統御すれば は にアクセスできない。これは移動や素性一致にみられる「介在効果」であり、統語部門における探索の失敗によるものと考えられる。この構造はまさに束縛条件 C 違反を発動する環境である。例えば を he、 を John とすると、he と John は同一指示とはならない。ここで が補文標識 C として、 が とを探索し、 と はそれぞれ に移動(内的併合)して、統語体{ , } と{ , }が作られる。これに外的な C-I (Conceptual-Intentional)システムがアクセスして同一指示解釈が生じる。しかし、 が C を統御する構造では介在効果により、 と は併合できない。結果的に同一指示解釈に必要な統語体を作られないことになる。基本的にはこのような発想であるが、これを束縛条件 C だけでなく、局所的な非束縛を要求する束縛条件 B や局所的な束縛を要求する束縛条件 A にも応用することで、束縛条件 A, B, C を統一的に説明することができる。詳しくは上記論文を参照されたい。

本研究の成果は、まったく新たな束縛理論の提案に留まらず、より一般的には、理論的研究に次の方向性を示すことになる：Chomsky 等は主要部移動(主要部どうしの集合併合)を認めていないが、本研究によって主要部移動の有益性が認められるのであれば、統語部門の最も根本的な操作である「併合」の適正な定義が必要となり、それに関わる計算効率性の原理の理解も進むことになる。形態操作のみならず意味解釈が直接的に統語体および統語操作に関与することになるため(「転送」プロセスは不要となる)そのようなプロセスを駆動する位相主要部の性質を解明することで位相理論をさらに発展させる可能性が開ける。本研究の方向性は、表層的な異同を越えて、Chomsky の最新理論(“Miracle Creed”)と深いところで呼応するものであり、統語理論の将来像にあらたな光をあてるものとなると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Toshifusa Oka	4. 巻 41
2. 論文標題 A Covert Head-Movement Approach to Binding Phenomena	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 JELS 41: Papers from the Forty-First Conference November 4-5, 2023 and from the Sixteenth International Spring Forum May 13-14, 2023 of The English Linguistic Society of Japan	6. 最初と最後の頁 206-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡俊房
2. 発表標題 Agree as Covert Head Movement (Probe+Merge+Transfer+ Dletion): A Minimalist approach to Wh-in-situ and Binding Conditions A, B, and C
3. 学会等名 東北大学大学院文学研究科/文学部言語学講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡俊房
2. 発表標題 素性一致メカニズムと移動現象
3. 学会等名 第8回「移動をめぐる諸問題」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡俊房
2. 発表標題 束縛現象に対する非顕在的主要部移動アプローチ
3. 学会等名 日本英語学会第41回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高野 祐二、岡 俊房、浦 啓之、多田 浩章	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 292
3. 書名 移動現象を巡る諸問題	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------